

## へえ、さすが余裕やなあ

お父ちゃんに、「わかった。」と言って、僕は、その先生の方を向いた。

「ちゃんと、挨拶しいや！」とお父ちゃんの声が聞こえた。

僕は、「うん」と言って、まっすぐ、講堂の前で、資料を手にしている眼鏡をかけた、厳肅な背広姿の先生に一直線に、脇見もせず、近づいた。

その先生は、すぐに僕が近づくのに気付き、僕の方をにらみ出した。まわりの父兄の視線も僕に集中していた。

僕はその先生から視線をはずさず、そばに行き、

「おはようございます！」

受験番号六十四番です。

今、学校につきました。」と、とっさに言った。

もう受験番号の若い受験生は教室に入っていた。

僕は、じっとその先生の顔を見た。その先生も一瞬、じっと僕を見た。

「わかりました。」とその先生はうなずき、そばの若い指導員を呼んだ。